

でこの世の中のことを営まれ続けるかぎり、世の中のトラブルはけつして解決しないというのが、仏教の根本的主張であり、私は、特定の宗派に属したいわゆる仏教徒ではないが、その点に関しては、全面的に同意している。

つまり、〈私〉というものがあるという思いがあり、そして、ひとがおり、物があるという思いがある。すると、必然的に、私のためになる人間、私のためにならない人間、関係ない人間と、人間が分類される。私のためになる物、ためにならない物、関係ない物と、物が分類される。私の思い・自分勝手なつごうを基準にして、すべての人間と物とが分けられ、本来分けることのできない、人類の人間関係、そして、人類と生態系や人類と地球、人類と宇宙との関係が、分離・分裂して、全部歪んでくるのだと考えられる（伝統的な唯識では、おもに、人間心理・人間関係における歪みが捉えられるのみで、社会全体の問題ははつきり意識されているわけではないが……）。

ともかく、自我と存在の姿は仮にしか存在しないということが、全身―全心的にわかることが、修行の出発点でもあり到達点でもあるというのが、唯識の主張であり、それが、冒頭から提示されている。主客対立図式の根本的否定といってもいいだろう。まずこうして、結論が先に示され、各論・説明が後に続く。

禅でも、「自我なんぞない。無我じゃ」といったふうに同じ結論が説かれるが、よく飲み込めなくて、「それは、どういう意味ですか」と問うと、「黙って坐れ」と、あとは説明抜きの実践を命

じられることが多かつた（もちろん、法話、提唱でもあるにはあるし、最近はもう少し親切な説明がされるようになっていようだが）。これにはもちろん理由があつて、「冷暖自知」という言葉でいわれるように、水の冷たいか暖かいかはほんとうには自分で飲んで知るほかに、覚りは口で説明しても結局わからない、自分で覚るしかないということなのだ。それは一面そのとおりであるが、唯識は、できるだけ説明し、理論的にも納得させようとする。結論だけではなく各論が展開されるわけである。唯識のやり方は、いわば「わかつて坐れ」ということなのである。これは、理屈の嫌いな人にはまどろっこしいだろうが、まず理論的に納得してからでないか実行できない人間には有難いところである。

無我と心

仏教は「無我」を主張するが、私たちの眼にはたしかに自我があると見えている。それは、なぜだろうか。第一頌の前半を現代語訳でもう一度引いておくと、「自我と存在の相は、仮に想定されたものであり、この想定は、識の妄容に依拠している」というのである。そのように、自分や物があるように見えてくるのは、識・心の働きのあり方に依拠している、そこに根拠があるのだという。ただし、この《心》は、私たちがふつうこれが自分の心だと思ひ、気づいているものとは、その

深さや広がり、性格に関してそうとう異なっている。唯識学は、私たちに、自分でも知らなかった自分の心の深みの地図・見取り図を見せてくれる。そして、その心の深みに、まず自我の根があり、さらに全人類、全生物にまで関わる、生命情報の世界があり、それを根こそぎにし、つきぬけた時、さらなる心の深みが無我であることが覚られる、と告げるのである。

もちろん、地図は現地ではない。实地・現場は行って自分の眼で見なければならぬように、それがそのとおりかどうかは、瞑想の実践によってしか知られないのだが、地図は目的地に迷わずに行くために役立つ。そういう地図の説明として、テキストを読んでいきたいと思う。

心の八識・三層構造

唯識では、心を三つの領域として捉える。第一頌の終わり、「その識の変容は、三層構造になつている」といわれている。もっとも、原典にはかならずしも「層構造」という意味はないが、解釈を加えて訳した。これは、唯識をフロイド、ユングなどの深層心理学と比較して理解し、トランスパーソナル的に総合しようという、私の意図で少し読み込みすぎているかもしれない。しかし、もともと唯識の伝統的あるいは文献学的に正しい解釈をしようと思つてゐるわけではない。また、少なくとも三つの領域からなると捉えていることはまちがいないし、「三層構造で捉えている」と

解釈しても、二頌以下とまったく矛盾なく読んでいけるのである。

言いわけをしておけば、これまでの仏教史、たとえば鎌倉仏教などを見ても、なにか発展がある時には、たいていそれ以前の經典が、創造的に誤読されている。そもそも、唯識の「ヘアーラヤ」という言葉にしても、『阿含經』では唯識のような意味で使われていたとは思われない。明らかに拡大解釈が加えられているのである。だから、問題は誤訳・誤読かどうかというところではなく、創造的かどうかにあるとわかっていいのではないだろうか。しつこいようだが、読者にはあらかじめ、本書が、唯識の意圖的誤読とまではいかなくとも、創造的な拡大解釈の試みであることを了承して読み進めていただきたいと思う。

第二頌前半

【漢訳原文】

謂異熟思量 及び別境識

【書き下し】

謂わく異熟と思量と 及び了別境との識ぞ

【現代語訳】

アーラヤ識、マナ識、意識と眼、耳、鼻、舌、身の五識である。

アーラヤ識とは何か

ふつうの——つまり覚っていない——人間の心のいちばん深い層は「アーラヤ識」と呼ばれる。その次の層は「マナ識」という。それから、私たちが誰でも気がついている「意識」と「眼、耳、鼻、舌、身」の五つの識がある。人間の心はこの八識・三層構造から成り立っていると捉えるのである（真諦は九識説で、アーラヤ識のさらに奥に清浄無垢な「アマラ識」を立て、密教は十識説で、さらに「一切心識」を立てるが、唯識では、アーラヤ識が転換して「大門鏡智」になるという。覚りのいちおうの説明としては、どれでも差し支えないと思う）。

「アーラヤ識」の「アーラヤ」は、「蔵」を意味する。よく知られたヒマラヤ山脈は、「ヒマハリ雪」の「アーラヤリ蔵」という意味だが、それと同じ「蔵」という意味である。すべての妄想と迷いの生の種子を貯えており、同時に真理の種子を貯えるところにもなる蔵という意味で「アーラヤ」と呼ばれる。これは、さらにくわしくいうと、蔵するところ（能蔵）、蔵されるもの（所蔵）、執着の対象（執蔵）という三つの意味があるとされている。

「マナ」というのは、「考えごとをする、思いはかる」という意味である。私たちは、意識の世界でものごとを思いはかっているだけではなく、もっと深い無意識の世界には、いつも何か、言葉や

イメージがうごめいている。意識より深いところで、無意識の欲望や感情とからみあった思考が働いている。フロイドのはるか昔、そういう世界があることに、瑜伽行派の人々は気づいていたのである。

それから、意識と五感の世界があるが、私たちは、ほとんどこの領域にしか気づいていない。そして、無意識の世界から浮かび上がってくる、欲望や怒りや執着やエゴイズムにふりまわされ、それが生きることだと錯覚して、すったもんだとやっているわけだ。自分が自由に生きているつもり（意識）が、実は、自分でも気がつかない自分の心の奥にあるもの（無意識）に引きずりまわされている。

そこでヴァスバンドゥは、まず自我や物が仮のものだといったあとで、仮のものを仮のものであると気づかせない、心の三層構造をすばりと指摘する。五感と意識、マナ識、アーラヤ識が、いわば三層のスクリーンをなして無我の世界を覆い隠しているのである。

それから、その三つの層がそれぞれどのような性格のものであるか、ややくわしく述べていくのであるが、ここで私たちが直面するのは、いわゆる深層心理学とはかなりニュアンスが違ったものである。どうすれば、私たちが、日々の、好きだ嫌いだ、得した損した、踏んだ蹴った、傷つけられた傷つけた……そういうふうな世界から自由になって生きることができるか、ありきたりの人間Ⅱ凡夫から、人間の可能性のギリギリの上限まで向上しようとする人間Ⅱ菩薩へと転換しうるか、

心の階層			
唯識	意識(十五感)	マナ識	アースラヤ識
フロイド	意識(十五感)	(個人的)無意識	×
ユング	意識(十五感)	個人的無意識	集合的無意識
ウィルバー	(影)／自我(十五感)	生物社会／実存の帯域	超個人的帯域
			心(Mind)
			×
			覚り・心

それを示すために、まず、心の構造を認識させ、その構造的な歪みがどのようにして発生するか、いかにして正すかを、順を追って説明しようというのである。

そこに、フロイドの精神分析やユングの分析心理学との接点と相違点がある。精神分析の見ているのは、個人的な生活歴に関わる無意識であり、ほぼ唯識のマナ識に対応するといっている。精神分析の個人無意識は、個人の生活歴に関わる無意識であり、ほぼ唯識のマナ識に対応するといっている。ただ唯識には、精神分析のような、性、発達心理、家族関係などをめぐる精神病理に関する洞察は決定的に不足している。また、ユングの〈集合的無意識〉は、ほぼアースラヤ識に対応するといえるが、もちろん〈元型〉などに関する洞察は唯識にはない。それに対し、フロイドやユングに決定的に欠けているのは、八つの識が四つの智慧に転換した時に明らかになる〈覚り〉〈心〉のレベルへの洞察であり、それを心理学の問題として再認識したのが、ウィルバーに代表されるトラ

ンスパーソナル(超個人)心理学であるといつていいだろう。フロイド、ユング、唯識は、トランスパーソナル心理学の枠組みによつて有効・妥当に統合できると、私は考えている(図参照)。

それはともかく、ほとんどの人(凡夫)が、これでよいと思つて生きているにもかかわらず、その結果として生まれてくる世界には、戦争、貧困、飢餓、抑圧、競争、憎悪、汚染、荒廃して不安と苦痛が充満している。もう少し身のまわりの話をすれば、子供の世界まで、非行、ケンカ、乱暴、いじめ、いじわる、そんなことでいっぱいであり、よくなる気配はない。なぜ、みんなよかれと思つて生きているのに、よくなるのか。よかれと思ふ〈意識〉と、よくない〈生き方〉のズレはどこから生まれてくるのか。それは、〈生き方〉の根っ子に潜む〈無意識〉の問題と考えるはかないだろう。

唯識は、そうした問題の根にあるものをはっきり示し、問題の根本的解決のための実践を促すことを目的としており、単なる知識・哲学として出かれてはいない。唯識は、単なる知識以上の、修行の手掛りとして読む時はじめて、ほんとうの意味を読み取ることができるもの、いわば〈臨床の理論〉なのである。臨床の理論というところに、フロイドやユングと唯識(さらには禅)との、対話・統合の可能性・必然性もあるといえるだろう。

しかし、ここではそうした問題に深入りせず、まず、ともかく唯識が語っていることを学んでいくことにしよう。

第三章 生命情報の世界

第二頌後半より第三頌

【漢訳原文】

初阿頼耶識 異熟一切種

不可知執受 処了常与触

作意受想思 相応唯捨受

【書き下し】

初めは阿頼耶識なり 異熟なり一切種なり

不可知の執受 処と了とあり 常に触と

作意と受と想と思と相応す 唯だ捨受のみなり

【現代語訳】

アーラヤ識は、過去の行為がそれとは異なった時に善とも悪とも異なった性質（無記）のものとなつて熟す識であり（異熟識）、すべての存在を仮構する種子となる識（一切種子識）である。

それは、ほとんど不可知の執着・保持されるものと場所であり、認識作用である。常に知覚作用、注意作用、感受作用、イメージ形成作用、意志作用と結合している。

アーラヤ識とは何か

日常の自意識では、私たちは、「いま、ここで生きている、それは、私が生きているから生きているのだ」と、考えている。「考える」というよりは、ほとんど無意識にそう思っている。むしろ、「感じている」といったほうがいいかもしれない。

この「感じ」「実感」というのが、あてにならないのだが、しかし、一種ひじょうに直接的で、はつきりしていて、疑う余地がないように見える。

だが、ほんとうにそうだろうか。よく考えてみると、単に「私が生きているから生きている」のではないのではないだろうか。

例えば、父親と母親が存在しなければ、私たちも存在しない。さらに、その父親と母親の父親と母親がいなければ、父親と母親もいなかったはずだ。

ここで、古い儒教道徳のような「親の恩」のお説教をしようと思っているわけではない。しかし、事実としてそうではないだろうか。私たちが、どんなに父親を憎んでも、うるさくて気に入くないと母親を嫌っていても、その父・母の——お陰という言葉がいやなら、結果といってもいいし、因果といってもいいが——存在なくしては、私たちはない。それからさらにたどっていく

と、先祖の一人一人、それらのどの一人が欠けても、今の私はいない。そうした生命の連なりの鎖の輪の一つとして、個人のいのちがある。

また、今朝、パンを食べたか、米を食べたか、肉を食べたか、いずれにせよ、私たちの生命活動を支えているのは、その小麦の、米の、牛の、豚のいのちである。それらが、今、自分が——私がこの原稿を書いたり、読者のあなたがこの本を読んだりするエネルギーを与えている。

こうした事実を一つ一つあげて確認していくと、果てしがない。そして、そういうふうにも果てしなく広がり、連なっているのが、私たちの生きている現実なのだ。自分というものがあると思いついて、この果てしない連なりを思い込みのなかで断ち切って、狭く限定してしまうのが、たいいていの人間のやることである。

こうしたさまざまな過去のものを原因として、その連鎖の影響力によって、私たちは生まれた〔生まれた〕は受動態であって能動態でないところに注意してほしい。ところが、私たちは、しばしばまるで自分で自分を生んだかのように思い込んで、勝手気ままに生きようとする。そして、他者に対して、しばしば「関係ない」と思ったりするのだ。本来関係あるものを関係ないと思い誤るところに、すべての誤り〱悪の根がある。

しかしそうではあるが、生まれたその時の心は善でも悪でもない。唯識は主張する。

唯識では、人が死ぬと、前生の業・カルマが貯えられた蔵〱アーヤ識が残り、次の世の父母と

なる二人が愛しあい、感極まって、父の精子と母の卵子が結合する時、結合してできたもの（現代的にいうと受精卵）に入る（托胎）という。この説は、やや信じにくいかもしれないが、トランスパーソナル心理学者たちは、退行状態でこれに類する体験がしばしば起こると報告している。私は、そうした体験が歴史的な事実かどうかについては判断を留保している。しかし、心理的体験としてはたしかにあるようであり、唯識のこの説も、修行者たちの瞑想中の体験を反映しているのではないかと考えている。

それはともかくとして、アーラヤ識は、「すべての存在を仮構する種子となる識（一切種子識）である」。そして、時いた種子が後になって芽をふくように、「過去の行為がそれとは異なった時」に熟して生命を生み出す。

種子は、ある幅とワクづけのある可能性をもっている。全面的に流動的・可塑的でもなければ、全面的に固定的でもない。そういう意味では、人間は、アーラヤ識に蓄えられた種子の性質に規定されて、生き、成長する。しかもそれは、基本的には「善とも悪とも異なった性質（無記）のもの」であるという。過去の行為は悪や善なのだが、にもかかわらず、アーラヤ識そのものは「異熟」状態になっている。これが、私の心の深いところにあるものだという。これは、現代的にいえば、〈生命情報〉という言い方をすればいちばんわかりやすいだろう。私のいのちの根底にある生命情報は、それ自体は善でも悪でもないというのである。

〈アーラヤ識〉の概念は、現代思想の文脈におけば、〈遺伝子〉〈本能〉〈脳の遺伝的能力〉あるいはユングのいう〈集合的無意識〉とも対応させることができるだろう。また、そうした比較研究を本格的に行なった学者はいないようだが、やがてそうした研究もなされるにちがいない。すでに、いわゆるニュー・サイエンスにはその方向が見られるが、そこでは、これまでの単に対象的な研究から捉えられたのよりもはるかに豊かな、〈生命情報〉の広がり・深みが確認されつつあるようである。

いずれにせよ、生命情報の世界そのものに、すべてのものがあると思える・仮構する種子がある、つまり、一切の存在が自分とは切り離されて別にあると思わせるのは、生命情報としてのアーラヤ識であるという主張は、現代の科学的認識論の水準と照らし合わせても、実证的確ではないかと思う。もちろんそれは、いうまでもなく、唯識の正当性が科学によって証明されるといったことではない。唯識には、瞑想体験という固有の根拠があり、〈アーラヤ識〉とは、瞑想体験から直観され理論化された、〈臨床の知〉としての〈生命情報〉であると見るべきだと思うが、客観的・対象的な知と臨床の知の対応は、きわめて興味深い。

一水四見

唯識では、物が実体として存在するのではないことの根拠の一つとして「一水四見^{いっすいしけん}」という洞察を提示する。すなわち、同じ一つの水（人間が見るとだが）が、天人には寶石で飾られた大地に見え、人間には水に見え、魚には住居に見え、餓鬼には膿の流れに見える。それぞれの生存形態（処とか道という）に規定された〈識〉の働きで、物は実さまさまに見える。したがって、そのなかのどれかの見方で捉えたような姿で実体として存在しているとはいえないというのだ。これはもちろん、地獄、餓鬼、畜生、人間、阿修羅、天などの生存形態の神話的な分類（六道）を受け容れない現代人には、そのままでは根拠にはならないように見える。

しかし、これも現代の科学的認識論の水準から見て、けっして荒唐無稽な空論ではない。

ソウリムシの心

例えば、ユクスキュル（ドイツの生物学者、一八六四～一九四四）が、「生物から見た世界」（思索社）のなかで、動物の世界から見たら世界はどう見えるか、さまざまな生物の研究の成果を述べて

いる。それによれば、生物の世界像は、種によって実にさまざまであり、どの動物も、そのまわり
に広がる「環境」のすべてではなく、ごく一部を感受して、その種独特の「環境世界」を形成する
という。ゾウリムシにはゾウリムシの、クラゲにはクラゲの、ウニにはウニの世界像があり、その
多様な世界像のどれか一つが、唯一正しいものだとはいえないのである。古代インド的な生物の分
類は無効だとしても、生物の種によって世界の見え方が違うという点では、唯識の根本的主張は、
現代生物学の成果とまったく一致しているようである。

ユクスキユルのあげる例のなかでもとりわけおもしろいのは、ゾウリムシの例である。ゾウリム
シにとって世界はどう見えているか。ユクスキユルによれば、ゾウリムシには、環境から来る無数
の情報のうち、ほとんど二種類しか意味をもたないように見えるという。つまり、ゾウリムシに
とっては、世界は、障害物か食物か、どちらかしかないらしい。ゾウリムシが、せん毛で泳いでい
る。そして、何かにバツとぶつかる。それが、食べ物のバクテリアの一種だとわかるとバクリとや
る。それ以外のものならば、バックして、向きを変えて泳いでいく。これだけで生きているという。
ウソのような単純さだが、どうもほんとうにそうらしい。ゾウリムシの心が描き出す世界は、ゾウ
リムシの生命情報に決定されていて、世界のすべては「たべもの」と「じゃまもの」の二種類に見
えているわけだ。これは、もしかすると、私たちの心の世界の極端な縮図だと見ることができると
ではないか。人間は、ひじょうに傲慢だから、ゾウリムシの情報処理装置は、刺激に対する単なる

反応のメカニズムであつて（心）とはいえないと考えるかもしれないが、人間も生物であり、情報に対する反応機構によつて生きていくという点では変わらないのではないだろうか。

不可視光線

人間についても、比較的単純な例を一つだけあげておこう。人間が光を見るという場合、私たちは、たしかに光（のすべて、実体）を見ているつもりだが、実は人間にはまったく見えていない赤外線とか紫外線というものがある。つまり、人間は、光のスペクトルの一部しか見ていない。人間という種に特有の眼の能力の限界内で光を見ているだけなのだ。しかも、私たちの眼は例えば七色の色彩がはっきりあると見るが、光の周波数の変化は連続的であつて、そのようにはっきりと七つの段階に分けることはできない。つまり、光自体に七色が「ある」のではなく、人間が光を七色に「見る」のである。人間は、ヒトという種の能力の限界のなかで、その枠組みで、光を捉えているにすぎない。しかも、文化人類学の知見によれば、人類全体が色を基本的に七色に分けて捉えているわけではなく、例えば五色に捉える民族もあれば六色に捉える民族もあるようだ。

さらに、私たちは光は光だと思つているが、放射線、可視光線、赤外線、電波……は、みな電磁波という意味では同じもので、スペクトルが違つているだけだという。しかし、私たちは、ふだん